

コミュニケーションのコミュニティ 市民主導 社会的基礎体力

1. はじめに

コミュニケーションの重要性はいうまでもない。コミュニケーションの活用としては、最近流行りの仕事への活用術としてコミュニケーションテクニックを連想しがちであるが、ここでは個人の能力向上や社会的な交流のためのコミュニケーションの活用に着目する。これは、社会的基盤づくりそのものの遂行にあたることを考え、そこにおいてコミュニケーションで形成される場をコミュニティと位置付けてコミュニケーションのコミュニティ(以降、単にコミュニティ)と呼ぶことにする。

本稿では、コミュニティに着目し、コミュニティの種類、様相、機能について考察し、これらが社会的基礎体力づくりにどうかかわっているかを論究する。ただし、基礎体力=基礎土壌とする。

2. 問題の所在

この世の中、分断化、同質化、人間関係希薄化、等が進む中、一方では事態の改善として期待されている個性や独創性の発揮が残念ながら枠内(組織内)に限定されており、しかも社会運営においても、個の尊重もまた全体の利益優先のうきめにあい、市民にとっては閉塞感を感じざるを得ないのが実状と考えられる。こうした時代背景のもと、意外にも若者はもちろんのこと中堅やシルバーも枠を広げたコミュニケーションに活路を求めており、議論よりもまとまった対話の場に人気が集まり、2010年代後半からはこうした動きがブームとなっていた。

そうした状況は、コロナ禍にもめげずに新たな展開を求めており、この流れに沿って本研究の立場ははからずも浮かび上がってきたと思っている。

3. コミュニケーションのコミュニティ概説

3.1 人間環境

一般には環境は、自然環境と社会環境の二種としているが、人間の人間らしい行動からなる環境を人間環境として、独自に設定する。なぜそうするかといえば、人間どうしてコミュニケーションを交わし人間の思考・行動がつけられることはあたかも人間を中心とした環境そのものであり、これを特別に人間環境と呼び、そこには話し合い・語り合いが構成できるとする。

人間環境(人的環境)には、家やご近所さんの基礎集団や街、地域、自治体、学校、企業等の機能集団まで含めているが、どちらかという小規模を前提とした環境を対象としたい。よって、人間環境においては、コミュニケーション中心に人間が集まれば、そこはコミュニティと捉えることになる。(次節)

3.2 どこでも人が集まればコミュニケーションのコミュニティ

コミュニティは話し合い・語り合いが成立すれば、どこでもがコミュニティである。このように考えれば、(上節の再記だが)家庭、地域、学校、職場などにおいてもコミュニティが設定できる。すなわち、街のコミュニティとして井戸端の場(溜まり場や道端)はもちろんのこと、家庭では囲炉裏の場(団欒の場)であり、職場で

の仕事に離れたコミュニケーションの場である。こうした場におけるコミュニケーションが街・地域さらに上位へと沸き上がっていく。

3.3 コミュニティの種類

コミュニティについては四種類を以下のように設定する。

- ・暮らしの場
- ・何の繋がりもない自由意思で臨む自由闊達な場
- ・機能的集団のなかにも小規模系で置かれている場
- ・上記三個の場を統合・総合する場

第二から第四までの場を広い意味では暮らしとしたいが、ここではあえて四個は独立場としておく。以下には、上記コミュニティの様相を列挙する(再掲)。ただし、暮らしには、仕事や学びの休息場も含めた。

(1)暮らしの中でのコミュニティ

- ・家庭では、囲炉裏(リビング)の場にて家族団欒。
- ・街では、井戸端(地域のスポット)の場にて自由歓談。
- ・職場では、仕事上のもの他には余談・雑談・歓談。
- ・学校では、休み時間などでの日常歓談。

(2)自由闊達なコミュニティ、地域にて；これは社会的な広がりを持った基本な場であり、地域に存在。(語り合いが主である)

- ・街(平場)においては、各地の朝活、種々のカフェ、
- ・論議対象を絞ったカフェや勉強会もある。これは専門の会に見えるが、市民主導としてやや広い域の場である。

(2')自由闊達なコミュニティ、目的有の場；暮らしの一環として市民主導による知的交流と市民力向上が目的である。この目的でも、語り合いのチャンスと場における自由な語り合いが可能である。なお、朝活とカフェの違いには、対象(分野)を設定するカフェに対し、朝活はすべてを対象とすることにある。

(3)自由闊達なコミュニティ、専門家集団内での小さな場；

専門の集団の中にも存在する小規模コミュニティとして、学生、実務者、専門家が自由闊達に場を持つこともままある。この傾向は、学術団体が市民と学との連携として市民には開かれた状態にしているため、場の形成は比較的容易である。例えば(著者が関与している)建築学会においては；

実務者討議の集い、

学生による語り合いのソボジョウがある。

この他、種々の場があるとは思いますが、著者は集約していない。

(4)コミュニティの積層；コミュニティが家庭や地域にあり、職場や学校等にもあるので、人間は至る所でのコミュニティと繋がっている。そこで、こうした様相をコミュニティの積層と呼んで、これらを一括してコミュニケーションの大きなコミュニティとしておく。すなわち、各コミュニティ(家庭、街、地域、職場、学校・団体、等)が枠を超えて多様に繋がるとしている。なぜ積層としたのかについては、小さな規模から大きな規模への実績の積み重ねが、積層コミュニティの中で可能となるからである。

(5)補足；市民力の向上を謳う市民への啓発活動として、行

政や大学などが実施する市民教育の場があり、これらは市民大学講座や市民塾などと呼ばれているものの、市民主導ではないことはいまでもなく、その意味ではコミュニケーションを楽しむということもなく、学習の範囲のものである。これと対峙するコミュニティには、暮らしの一環としての知的交流がコミュニケーションのコミュニティである。(この他は見当たらない)

3.4 コミュニケーションの円滑には

市民主導による市民のための場が大前提である。

(1)進行の主導； 市民の自発的発言について、自発あつてのコミュニケーションであるので、発言を促すと引き出すといった第三者による行為は無用である。このためか、朝活とか問題設定しないカフェでは、コミュニケーションが自然と盛り上がるものである。

これに対して問題やテーマを設定するカフェでは、進行の効率化や効果の追求として、コーディネートやファシリテータの主導のもと、市民の声を最大限引き出し、設定した方向に事を集約させているカフェが結構多い。確かに、そこには市民の気配はあるものの、発言にはガードラインに強いられざみという感はぬぐえない。もちろん、そうでないカフェも多い。

(2)場における公平性； 朝活では、政治(選挙)、宗教、初販売、男女交際、他を目的とする参加は禁止となっている。また、誹謗中傷はままた起こりうるので、そうした行為にも参加者の協力を得てチェックしている。

カフェでは、進行において変容と傾聴を基本としている。すなわち、相手の意見に反論でなく先ず聞くこと、自分意見にこだわらず変わってもいいという柔軟性を持って会に臨むこと、としている。なぜか。背景には、カフェは朝活と違って問題をかかなり奥深くに迫ることもあって、各自の見解や考えが割合出やすいことがあるためである。

なお、カフェでの公平性問題については節 6(1)にて論ずる。

4. 自由闊達なコミュニティ、富山における知的交流詳論

4.1 概要

市民向け暮らしの一環としての知的交流(コミュニケーションのコミュニティ)には、市民が運営する街の知的コミュニティである「朝活」と「カフェ」が人気の的であり、人間の生き方から時事問題まで広範囲なテーマにて市民社会の素養向上が結果的に担われている。また、専門的テーマの研究会でも、自由闊達を保持している市民のコミュニティも結構あり、カフェ文化が市民の知性のオアシスともなっている。

著者の地元富山では、朝活とカフェを合わせて10個以上の盛況の場を次節にて紹介する。

4.2 朝活(写1)

もともとの朝活は東京で(2009年)発足し、ライバルに差をつけるためにビジネススキルを磨くことを目的としているが、富山ではビジネスよりも人間性磨きに重点が置かれている。これが、自宅と職場の往復に飽き足らない若者方々には大いに受けており、朝活の話題も身の上の話から政治的な次元のものまで多岐多様としているからこそ、参加者同士が話し合えたことに大いに満足されている。なお富山では、朝活富山が2009年に、朝活上市が2014年に発足し、今も活動を続けている。



写1 朝活上市 表1 朝活上市テーマ

以下に様相を列举する。

・朝活概要；モロニングサービスを食して会場が和んだ後に知的交流。会場は喫茶店。コロナ禍以降、リアル開催を避けリモートとなり、これまで県内

テーマ分類	数字は開催回数、コロナ以前に集計、全114回
大分類	小分類
人	21: 人 10、人生 11
体	22: 健康05、食 06、スポーツ 11
生活	13: 生活09、旅行03、レジャー01
仕事	13: 仕事08、農業03、福祉02
勉学	07: 勉学07
芸術	11: 芸術04、音楽07
自然	07: 自然02、植物05
地域	20: 地域08、コミュニティ05、交流03、歴史04
他	01: 技術01

の方のみの参加が隣県や関東・関西圏からも多くが参加されるようになった。参加者はリアル期では多いときは40人、平均20人程、リモート期では多い時は20人、平均は10人程である。

・テーマ；個人ベースで自分がどう問題を設定し、どう取り組んだのかを、プレゼンタ中心もしくは全員で話し合われる。表1には、これまでのテーマを分類して示しておく。

・参加者；若者や主婦が中心。開催は月1~2回、週3回あり。
 ・進行；プレゼンタが進行役を務めるが、コーディネートはしない。
 ・効用としては；自身の考えや人生をもとに歓談することで、自身を相対化し、活力を得ることになる。

4.3 カフェ(写2)

県内では2000年頃から発足のカフェが次々と閉店し、2013年に開始のカフェ(街中ゆったりカフェ)が今に残るカフェでは最古参であり、その後哲学カフェが2014年に開始し、憲法カフェや社会化カフェが後追した。



写2 街中ゆったりカフェ

街中ゆったりカフェだけがコーディネート無し参加者全員による進行で論議を楽しんでいる。他のカフェではどうしてもコーディネートなどが進行を仕切っている。なお会場は公的機関利用。

以下に様相を列举する。
 ・カフェで討議対象を限定；専門に特化した市民の集う場として、科学カフェ、建築カフェ、哲学カフェ、社会カフェ、憲法カフェ、等がある。
 ・テーマ；社会問題のなかからいくつかを取り上げ設定されているが、設定なしの場合もある。テーマ例は；

豪雨災害、地球環境、ゴミ問題、椎名道三、腰痛、ばんどり騒動、米騒動、古墳、古代史、剣岳登頂、他
 ・参加者；専門テーマのカフェにおける場合でも一般市民が参加し、自由に語り合う。

・進行；勉強会の様相であっても語り合いを通して進行は一方にみならず、ファシリテータ・コーディネータを不要とすることもあり。
 ・効用としては；断片的知識が各自の中でつながりをもって知のストックになり、自らの発信や他者の受信の貴重な場となっている。また、市民社会の素養向上を謳う目的設定の市民教育との相乗効果もある。

5. 実際に運営の場や会

5.1 運営の様相

場や会の運営には、思いを持った人が世話をする。こうした世話人はコミュニケーション仲間として互いに緩く繋がっている。著者の場合、いくつもの会を主宰するが、他の方の主催の場にも応援として連携して参加している。以下に、実際に著者が関わる場と活動を列挙する。印*は全国区の間である。

- ・個人運営；小規模ゆえ世話人はほとんど単独；
朝活上市、街中ゆったりカフェ、富山地震防災研究会
- ・集団運営；仲間が世話人となり集団で；
学生シボジボ*、実務者討議の集い*、
「災害と社会」研究談話会*、人新世人類統合研究会*、
滑川宿街並み保存と活用、おおかみこどもの花の家
- ・参加者として支援（著者の朝活・カフェ等との連携）；
コミュニティ連携として、世話人同士互いに相互交流。
歴史カフェ、社会科カフェ、憲法カフェ、
哲学カフェ、ワルトカフェ、朝活富山、朝活呉西（最近閉店）、
富山の建築おしゃべり会（最近閉店）

5.2 連携において

著者らの場と他者の場との相互乗り入れの形で連携している3つのカフェについて紹介する。これらのカフェでも基本は市民主導、市民感性磨き、である。ただし、コーディネートが場を緩く仕切っている。

(1)社会科カフェ(写3)；もともとは政治に関心を持つ市民が増えることを期待して、政治の観点から社会における種々の問題を論議するもので、結論を得ることよりも議論することにより、種々問題の源を知り、解決に向けたセブを磨くのが目的である。



写3 社会科カフェ

進め方については、場にはある程度の情報提供としてプレゼンが問題解説を行う。問題の位置づけと共に、どんな方法がこれまでどうアプローチされているか、何が得られているのか、を現状の段階として説明が続く。その後は、直ぐに討議になり、プレゼンは仕切ることなく、参加者は、各自の反応、社会的意味を述べあうのである。もちろん、最後においても方向性や結論は場としては無く、各自思い思いに納得すれば十分とし、その意味でも多様性・自律性は徹底して確保されている。ちなみに、これまで論議の課題については、富山はエデンか(福祉社会において富山がとやま型福祉政策をしていることにエデンと重なるのではとの論)、経済から家族を考える、等。

(2)憲法カフェ； 憲法カフェは、兄弟分で憲法9条を守る会とか改憲反対の会などとは軌を同じにしていたが、狭い地域では憲法のみで議論を進めるのは難しく、結局街なかの問題に関する討論会となっている。テーマも、人に優しいオガニック、農業問題、コミュニケーションの本質、公害問題、徴用工問題、等

(3)哲学カフェ； 哲学カフェは全国至る所にあり、哲学の勉強として体系的な哲学学習もあれば、時事問題をじっくり語り合う

場としてのもの、哲学をじっくり語り合うもの、など多様である。富山のような小さな圏域では、哲学カフェは一箇所しかないにもかかわらず、市民同士がじっくりと語り合えるので、哲学カフェの人気は高い。

扱うテーマについては、人間とは、時間とは、宇宙とは等の哲学本来のものを扱わない訳ではないが、生きがい、愛、責任、等日常のものに人気がある。これまでのテーマを列挙する；ベーシックインカム、ケア、グローバリズムとナショナリズム、流通、愛、地域とは、AI、新自由主義、パンデミック、他。

6. 社会的基礎体力づくりへ

社会的基礎体力づくりはコミュニケーションのコミュニティづくりと街づくりから成るとしている。(本稿で扱わないが)街づくりについては、街や地域で磨かれる感性からの思考・行動による体験の積み重ねが地域やその上位の枠組みへと沸き上がっていくと考える。コミュニケーションのコミュニティについては、コミュニティにおける各理屈の学びもさることながら理屈の背後にある感性の磨きに潜在的ニーズがあり、これが各種のかつ積層のコミュニティで梯子することでより多様な状況にも対応可能な感性へと磨かれ、社会的基礎体力へと進化していくと考える。

こう述べるとすべて順風満帆のように見えがちであるが、実際には、規模にかかわらず、(一部参加者からの)見解の相違や偏狭な見解により、会の進行や公平性に支障をきたす問題もある。一部カフェにみられるこうした問題について、議論の公平性の観点で検討し、次いでそこから浮かび上がる意見とそのバックボーン(思考土壌)について論考する。

(1)公平性議論； コト禍あけの時期に某カフェにおいて、参加者各位から会運営について「あまりにも偏った意見が正論であるかのように断定する押し付けは不条理」の指摘が相次いだ。この種の問題はどのカフェでも大なり小なりあり、時には大激論にもなることがある。

ではなぜそのような問題が生ずるのか。これは会に集まる方々の時代反映の考えが深化し、年齢とともに諸知識を会得して自分流に考えを組み立ててきた結果と捉えている。

公平性保持への対処については、第一には誰にも異論の無い問題に限定してきわどい発言が出ないようにすること、第二には特定発言を差し控えるように参加者に同意をいただくこと、第三には特定発言には対峙する発言で応酬すること、が挙げられる。このうち第三の対処が両論併記・両論発言としてカフェの開催目的に合致しているといえる。

(2)意見の背後には； 問題にしたいのは、偏狭な意見がどうして出てくるのか、偏狭な意見は広範な意見との違いはどこにあるのか、それは意見の背後にある思考土壌との接し方にある。土壌から何かを見だし発掘となると向き合う人間の素養が問題となり、種々の都合で恣意的に対応するなら、結果として都合のいい狭い土壌が形成されたことになる。例えば、種々範疇の前提条件疑わず、歴史認識の一方的押し付け、社会システムへの付度、利害関係を持ち込み、科学技術でも客観事実に基づかない論調、等、枚挙にいとまがない。

そしてまた今ひとつも問題として最近の SNS や YouTube

によりフェイクも含め情報洪水や情報漬けがあたりか公平な市民の声といわんばかりに市民社会に押し寄せているものもある。すなわち発信者側からは、市民や専門家で作りに上げて土壌の全体を見ずして、自分に都合のいい見方を相対とせず絶対として世の中にばらまき、世の中における偏狭な姿勢が合理性を持つかのように仕向けてもいる。

その一方では、こうしたことを容認するかのように、フェイクや無根拠があっても市民の方で取捨選択をすればいいとの不用意かつ安易な論も一部にあり、世の中における不条理がますます増えてもいる。確かに、世の中ムードが盛り上がりれば何でもよしといった根強い風潮もあるだけに、改善にむけて、市民はできることから、専門家は良識見識に基づいて行動して欲しいものである。その意味でもコミュニティの役割は大きい。

7. 学術世界での市民感覚のコミュニティ、建築系を例に

市民感覚を持つ学生、実務者、専門家のコミュニティを扱う。

7.1 学生・実務者中心のコミュニティ

学会は今でこそ市民対象は当たり前となっているが、2000年以前には市民への配慮は謳っていたものの、学会に結集する学生や実務者には今ひとつ光があたっていなかった。市民への対応はもちろんのこと、学生や実務者にも配慮が近々の課題としてして学術の世界においても自律思考があるべきとして、討議の集いが2002年から、シボジワが2004年から毎年実施されるようになった。こうした場も、学生や実務者が主体のコミュニティそのものであり、多くの方の支持を得て今なお継続されている。

(1)学生によるシボジワ(写4)； 学会では、集まる学生への対処としては研究・教育面における配慮はあるものの、学生の人格形成や基礎素養の育成は不十分として、北陸支部では2004年から、全国大会では2007年から学生主導で知的交流の場をつくり運営がされてきている。学生主導が毎年実現させるのは困難となっているが、それでも学生主体は踏襲されている。なお、本企画において学生は、志教育としての知的交流の楽しさを満喫され、貴重な体験をしておられる。

(2)実務者討議の集い； 新社会人・若手社会人として実務者に光をもっと当てるべきとして実施されているが、最近はやがた禍もあって休止中である。学会では自由闊達に実務者中心にして学会人との知的交流は大変珍しく、これまでは結構盛り上がった。なお、会は学会内にて実務者地位向上の運動よりも、自由闊達な実務者の存在を地味にアピールし続けていた。

7.2 専門研究者主導の自由闊達コミュニティ

専門研究者は活躍の場を関係の学会に求め、学会を介して種々コミュニケーションが図られているが、好奇心旺盛な各位は学会の枠から飛び出して自由奔放・自由闊達な場を自ら作り活動活躍している。著者の知る勢いある二つのコミュニティを紹介する。

(1)「災害と社会」研究談話会； 前身は建築学会2017年設置の特別研究委員会であり、ここに多才かつ異色な方々の結集により、多岐多様・自由奔放の精神がいかに発揮されていた。その後2019年設置の特別研究委員会(第二次)をへて2021年度から任意の研究會に模様を変えても何の拘束もなくやりたい放題の展開となり、時には発散傾向さえも頓欲

に取り込んで異色な存在として今日に至っている。

(2)「人新世人類統合研究会」(略称は星野研究会)； これは、2023年設立され、地球環境危機による人類絶滅をどう回避・解決するという大問題について早急に研究かつ実践で対応するとしている。そこには、研究と実践を両輪とする多才・多様な方々が結集されており、単に研究バブルに収まることなく、環境危機に向き合っている。現在は気候変動が臨界点を越えてジンジリと押し寄せる気候大災害をどう防ぐか、研究と実践を行っている。異色な人材集団だからこそ問題に対処できると皆さん、意気揚々である。



写4 学生のシボジワ

8. おわりに

もともと市民の対外的な自由を求めてコミュニケーションの場とチャンスをつくることから場づくりを始めて20年程、今ではこれが市民層の社会的基礎体力づくりの重要な一つと位置付けて場を運営してきている。そこでは、世の中では分断化、同質化、思考・行動の矮小化、等のためか思考停止化が大きい気になるところではあるだけに、自由闊達なコミュニケーションへの期待が大きく、コミュニケーションのコミュニティはブームが過ぎたとはいえ、少しずつ着実に力をつけていることが実感される。

実際の具体的な運動として著者は、市民向けには、暮らしの一環としての知的交流(コミュニケーションのコミュニティ)の場づくり・場運営を市民主導として展開し、特に街の知的コミュニケーション「朝活」と「カフェ」に力点を置いている。そこでは、人間の生き方から時事問題までの広範囲なテーマにて市民社会の素養向上を図っている。それともう一つ、専門的テーマの研究會でも、自由闊達を保持している市民のコミュニティを支援し、カフェ文化が市民の知性のオアシスとなっている。以下に議論をまとめる；

(1). コミュニティの場とチャンスが日常化し広がること及びコミュニティにおける対等感と各自の作り上げ感により、市民は(どの年齢層も)コミュニティに期待を持ちかつコミュニティの良さを実感している。

(2). 問題の根源からの市民思考は語り合い(コミュニケーション)を基礎にしている。これがコミュニティをつくり、どんなコミュニティであっても社会的基礎体力づくりそのものとなる。

(3). 市民の自由闊達なコミュニケーションのコミュニティが、各種のコミュニティと積層して大きなコミュニティをつくっている。街中のコミュニティが地域やさらに上位に位置するコミュニティに向け積み上がっていく。

△今後はコミュニティの一層の充実化に向けて論考することとしている。

A1. 謝辞；コミュニティの場づくり・場運営に励んでおられる関係各位並びに議論愛好仲間自由闊達な方々に記して謝意を表する。

A2. 参考文献 1) 富樫豊：実務者中心の研究者・教育者との本音のディスカッション、2002.8.3 実務者討議の集い「まとめ集」、「21世紀の教育に向けて生涯教育小委員会からのメッセージ」、日本建築学会生涯教育小委員会、2003.3、pp.112-119 2) 富樫豊、栗原知子；学生による語り合いのシボジワについて、日本建築学会北陸支部研究報告集、63号、2020.7